

---

# 贈り物

神童サーガ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

贈り物

### 【著者名】

神童サーチガ

N4534F

### 【あらすじ】

作者が見た夢を改造した話です。好きな人の誕生日プレゼントのために少女は走る。

「マナ・・・今日サヨが誕生日だつて覚えてるか？」

「え・・・お兄ちゃんが？」

一人の少女と青年が話をしてる。

少女の名は、マナ。青年の名は、タクマ。

二人は兄妹だ。でも、本当の兄妹では無い。が、同じ家に住んでる家族同然なのだ。

そして、サヨはマナと同じ年だ。なぜ“お兄ちゃん”と呼ぶのかと言つと、孤児院みたいに住んでる家に先に来てたからだ。

サヨの容姿は、女の子みたいに可愛く細身なのだ。

マナは、ボーアッシュで運動神経が、とてもなく良い。

マナは、サヨを溺愛してる。だけど誕生日を忘れてたのだ。

タクマは、頼れるお兄さんって感じ。

「タク兄・・・どうしよう」

「あと五分だな」

タクマは、腕時計を見てボソッと言つた。

「体力はあるか?だいぶ距離あるぞ」

「お兄ちゃんのためだつたらーー。」

ガツツポーズを取るマナに笑ったタクマ。

「さて、行つて来いーー。」

タクマの声に走り出した。

目的地は、花屋ーー。サヨが大好きな花が売っている「フラワー万里」だ。

ここからの距離は、一キロはあるだろう。

しかも、閉店する時間が過ぎる前に行かなくてはいけない。ガードレールを飛び越え、静かな道路を全速力で走る。目の前に見知ってる姿がありスピードを緩めてた。

「お兄ちゃんーー。」

「マナちゃんーー。どうしたの? 急いで

喋り方さえも女の子っぽいサヨはモテる。

でも、マナが一から瀆してるとこいつ噂がある。

「あ・・・その・・・」

「遅くながらこついに帰つて来てね

何も言えず黙つてると、優しい言葉を掛けてくれた。その優しさに胸がギュッとなつた。

「うん……絶対早く帰つて来る……！」

サヨに手を振り、先ほどよりも速いスピードで走った。サヨの笑顔は、マナにとって栄養剤だ。

「見つけた！－！」

店長さんが、シャッターを下ろそうとしてたのが見えた。

「泰さん！－！」

「んあ？ マナか・・・どーした？」こんな時間に・・・

一応だが、時間は八時五十九分だった。

「花・・・ください」

流石に、地元の人達に、神速の姫君と呼ばれても、あの距離は苦しかったようで、息切れしながら答えた。

「どんな花ですか？」

知り合なじこの花屋の店長の奏そひは、マナを介抱しながら聞いた。

「ピンクのカーネーションを・・・」

「なるほど・・・サヨクさん？」

奏の言葉にボツと音がした。

その音の元は、マナだった。

顔を赤くして、金魚みたく口をパクパクしてゐる。

「あ・・・た、誕生日だから・・・」

「クスッ・・・わつかい？」

からかわれてるのが嫌になつたマナは、話を逸らした。

「・・・」

「面白いものを見せてもらひつたから良いよ。ラッピングはさせてね  
？」

頷いたと同時に店の中に入った奏。

涼しい夜風が、火照った頬を冷ましてく。

「はあ・・・流石に“アナタを熱愛”はダメかなあ」

「ダメじゃないよ。案外サヨくんは気付かないんじゃ・・・」

背後からした声にビビったマナ。

「はい。出来たよ」

「わあ。キレイ・・・」

泡のような飾りが、カーネーションを映えてる。  
他にも靈草もあった。

「カスミソウ？」

「切なる喜びや無邪氣つて意味があるんだ」

無邪気は時に残酷だなどな、と何かを思って出すよつて言った奏。

「まいひー、もう九時過ぎてるや。帰れ」

「うん。 ありがとう……奏ちゃん」

花を優しく抱え、はにかみながら笑顔でお礼を言った。

そして、来た道を急いで帰つて行つた。

奏は、そんなマナの後ろ姿を優しく見てゐるのでした。

「頑張れよ・・・・

私のもう一人のお兄さんの陽<sup>よ</sup>  
叱りられて縮こまつてると声がした。

「陽・・・サヨのためになんだ」

「タクマ・・・はあ。中にいるぞ・・・」

タクマと陽は、親友同士だった。  
助けて貰つたタクマに、お礼を行つて走つた。

「お兄ちゃん！？」

「お帰り・・・大丈夫だった？」

夜道だつたから、と心配顔で見たので、俯いたマナ。  
耳が赤かった。

「これ・・・プレゼント・・・用意ちゃんと出来なくてゴメン」

「・・・もしかして、僕のために夜道を？」

頷いたら、バカ！..と怒られた。えつ、とわけが分からなかつた。

「なんで、そんな危険なこと……外だって安全つてわけじゃないの……でも、無事で良かった」

サユの言葉に泣き出したマナ。  
涙泣き出したマナにオドオドして泣くサユ。

「『めんなさい』……『めんなさい』……『めんなさい』  
お兄ちゃん……『めんなさい』

「ううん。僕……怒鳴つて……『めんな

優しく頭を撫でるサユ、まだしゃべり上りてるが少しひつ落  
ち着いてきた。

「これ……プレゼント……

「…………」

花を差し出した。驚いた声がしたが、マナは下に向いてるために  
分らない。不安に思つてゐる。

「キレイ……今まで一番嬉しいこと

「ホント?」

まだ泣きそうな顔で見つめるマナに、優しい笑顔を向けるサヨ。

「・・・花言葉の意味、分る?」

「・・・」

何か言つたようだが、マナには分からなかつた。  
でも、渡せた達成感で一杯だつた。

「・・・僕も好きだよ」

「陽お兄さんにプレゼントしなきゃダメだね」

「あーー忘れてた」

次の日の夜に、サヨは言つた。  
またしても走つたマナ。  
用意した花は、クチナシの花だつた。

「なあ、タクマ……どいつ意味だ？」

「まみつ……俺等つちゅつぱシスコンだよな？」

「どーこつ意味だよ……」

親友同士で会話をしていた。

マナから貰った花を不思議に思いながら。

『わたしは幸せです』

(後書き)

曖昧に覚えてる夢だから、ストーリー性が無いです。でも、ちゃんと  
とした小説を創つてみたい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4534f/>

---

贈り物

2010年10月9日01時39分発行